

▶ 第一回オリンピック教育研究会 報告書

@筑波大学附属高等学校3F 会議室

▶ 2011/06/07 17:00-19:10

▶ 主催: CORE -オリンピック教育プラットフォーム

文責: CORE 事務局 (筑波大学 SPEC307)

第一回オリンピック教育研究会 報告書

@筑波大学附属高等学校 3F 会議室

CORE 第一回オリンピック教育研究会を6月7日筑波大学附属高等学校にて開催した。当初は3月中旬に開催予定であったが、震災の影響で延期することとなっていた。同研究会には、日本オリンピック・アカデミー等外部からの来賓を含め計30名が出席。COREのコンセプト及び経緯説明、各種事業報告の後、今後のオリンピック教育推進について活発な議論が行われた。

—研究会次第—

1. 開会
2. CORE 概要説明及び23年度活動計画
3. 平成22年度事業報告
4. 平成23年度事業計画および報告
5. オリンピアンによるオリンピック教育、オリンピアンのためのオリンピック教育
6. ディスカッション
テーマ：「オリンピック教育の展開」
7. 来賓挨拶
8. 閉会

司会：竹村瑞穂（CORE 事務局研究員/筑波大学大学院）

開会挨拶

東照雄（筑波大学副学長/附属学校教育長）

4月に教育長に就任し、前任の阿部生雄先生を引き継ぐ形となった。既にこの組織は学内の認めるところとなっており、附属学校教育局としても専門委員会を設置し動いている。

筑波大学の学内予算はまだ少ないが、皆様の協力をいただきながら、COREが将来的に国際オリンピック委員会（IOC）の理想とするオリンピック教育・研究センターに発展することを祈っている。

CORE 設立及び昨年度活動概要

真田久（筑波大学教授/CORE 事務局長）

昨年の8月5日、山田学長からIOCロゴ会長へオリンピック教育センター設立許可の依頼をしたところ、8月18日には歓迎表明を受けた。そして12月10日の嘉納治五郎像除幕式の際に「CORE：オリンピック教育プラットフォーム」を正式に発足させた。

それではそもそも、オリンピック教育とはどのようなものか。

一般的な理解としては、以下のように考えられている。

- ①オリンピックそのものについて学ぶこと（価値、競技、ルール、アスリート等）
- ②オリンピックを通して付随的に学ぶこと（開催都市の文化に触れる、世界の様々な問題を学ぶ等）
- ③スポーツの価値について学ぶこと

さらにCOREではここに日本の独自性として嘉納治五郎の「精力善用」「自他共栄」の精神を加えて教育実践に活かしていくことを目指す。オリンピック教育の普及・促進を通し、人間の可能性を信じる心や国際理解の心を身につけ、平和な国際社会の構築に貢献することをCOREの理念として掲げている。

COREの目的は以下の通りである。

①オリンピックを通じた国際理解・平和教育の推進

②教育実践モデルの開発

③オリンピック教育・研究に関する情報収集・発信

④国際的な視野を備えた人材育成

今年度の主な活動計画としては、筑波大学附属学校での様々な取り組みを世界に広報し、大学では継続して総合科目の五輪講座を展開していくことを予定している。また同附属高校からは8月13～21日に北京第4中学校で行われる「国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム」に2名の生徒が派遣される予定である。

研究関連では、当研究会をはじめ台湾での国際シンポジウムでCOREと日本のオリンピック教育について発表。また来年のロンドン五輪に向けて、長野国際親善クラブと手を組み一校一国運動をもとにしたアクションについて検討中である。

COREの最大の特徴である附属学校を活かした「研究・教育実践」の相補的なシステムに、世界の各方面から期待が高まっている。

平成22年度事業報告

○附属高校における「体育理論」授業展開

宮崎明世(筑波大学助教/附属高校教諭)

昨年度5回にわたって行われた保健体育「体育理論」でのオリンピック教育について報告する。

2009年度は東京がオリンピック招致をしていたこともあり、「政治とスポーツ」「スポーツとフェアプレー・嘉納治五郎」「ドーピング」の各テーマで授業を行った。2010年度はCOREの取り組みの一環としてオリンピック授業を実施した。以下の授業例は一般の保健体育教師が行える範囲で構成しており、今回は東京都から配布されたオリンピック教育の教科書の内容をもとにアンケートを実施

し、生徒の興味・関心の高かった次の5つのテーマで授業を行った。

①オリンピックとは

オリンピックの歴史、またその意義について学習した。またIOCやNOC(国内オリンピック委員会)というオリンピックの組織についても触れ、オリンピック・ムーブメントの広がりについて学んだ。

②日本とオリンピック

1964年の東京五輪に焦点を当て、その概要や活躍選手(アベベ・円谷幸吉・ヘーシンク・東洋の魔女など)について学んだ。また1972年札幌、1998年長野についても触れ、生徒が今後のオリンピック・ムーブメントについて考える良いきっかけとなった。

③古代オリンピック

古代オリンピックが残した有形無形のレガシーに着目し、オリンピック期間中の休戦協定「エケケイリア」について取り上げた。競技に関しては「スタディオン走」や「パンクラチオン」について紹介し、さらにオリーブの葉冠について学んだり多彩な内容で盛り上がった。しかし最も生徒が興味をもっていたのは、競技が「全裸」で行われていたことであった。

④オリンピックとフェアプレー

友情のメダル、ラシュワンのフェアプレー、国際フェアプレー賞、有森裕子選手が運営するハート・オブ・ゴールドの活動などを紹介した。

⑤河合季信先生による講義

オリンピックである河合先生にオリンピック・バリューについて講義して頂いた。一般高校生向けとしては少々難しかったかと思うが、附属高校の生徒にはよく伝わっていたと感じる。オリンピックと各競技の世界選手権

の違いを考えるきっかけとして、良い機会となった。

全体的に教える内容が多く、生徒に考えさせる時間が少なかったことが反省される。今後は内容を絞るとともに、教授法の改善が必要であると感じる。

○秋葉忠利(前広島市長)講演会

大林太郎(筑波大学院 M1/CORE 研究員)

2011年1月15日、筑波大学附属中学校で行われた秋葉氏による講演会の取材報告である。講演では、当時広島市が検討していた2020年の五輪招致についての概要説明の後、空襲を受けた前市長自身の経験を踏まえ戦争や原子爆弾の問題点が指摘された。また、当時秋葉氏が所属していた世界平和市長会議について触れ、生徒に「考えたことを実際に実行すること」の大切さを説いた。2時間に及ぶ講演であったにも関わらず、全校生徒600名は熱心に耳を傾けていた。

生徒の感想には、単なる競技会ではないオリンピックの多様な価値を指摘するものが多々見受けられた。スポーツ嫌いでオリンピックに興味を示していなかった生徒にも、スポーツと世界平和・国際理解について考えてもらうきっかけとなったことが窺えた。これは、オリンピック教育のより幅広い普及への糸口を提示し、他の教科・話題と絡めていくことの重要性を示しているのではないだろうか。

平成23年度事業計画 & 報告

○附属高校での取り組み

中塚義実(筑波大学附属高校教諭)

今回の報告では、附属高校で行われている3年生の選択講座「オリンピックと教育・スポーツ」、及び8月に参加を予定している北京でのクーベルタン・スクール派遣事業について紹介する。そして附属高校において通年で実施されている体育理論の内容についても紹介したい。

選択講座「オリンピックと教育・スポーツ」には、今年度は5名の生徒が参加。3年生、しかも他に国語や数学の選択肢がある中でこの講座を選んでいることから、オリンピックやスポーツに興味を持つ生徒が集まっている。授業では座学とフィールドワークを織り交ぜている。先日講道館を見学し、国立競技場の見学ではトラック中央の芝生に立つなど普段ではできない体験が好評であった。

また、附属高校と嘉納治五郎の関係を学びながら、生徒によるディスカッション形式も取り入れている。生徒のコメントからは、各授業が生徒にインパクトを与えていることがみてとれる。6月10日には田原淳子先生(国士舘大学)にお越しいただきクーベルタンに関する講義を開催予定で、同講義の後半は全校生徒誰でも受けられるよう準備を進めている。北京第4中学校でのクーベルタン・ユースフォーラム派遣については、全学年揃った4月の始業式でのアナウンスののち7名の応募があった。選考で2名に絞り、今回はオブザーバーという形で参加する。

また、保健体育科の体育理論の授業は通年で行っている。「スポーツと現代社会」など多彩な視点から講義を行っているが、後期課題のグループレポートに関しては、これは附属高校の特色なのか「スポーツとは？」といった深い内容に取り組む班が多く見られた。中にはオリンピック教育の中身にも関わるよう

なものもある。今後も継続してこの場で報告できればと考えている。

○附属特別支援学校高等部の取り組み

寺西真人(筑波大学附属視覚特別支援学校教諭)

「オリンピック教育」ときいて最初は手放したが、パラリンピックも入っているということに関わることになった。これまで選手育成を中心に取り組んできたが、今回はそのあたりからアプローチしてみたい。

近年ではパラリンピックのレベルが上がっており、選手はなかなかメダルを取るのが難しくなっている。また、視覚特別支援学校からも多くのパラリンピアンが出ているものの、実際にパラリンピックに出場する際に、依然として周囲から「なにそれ？」といった反応もある。この状態では、オリンピック教育・パラリンピック教育といった言葉をいくら叫んでもなかなか理解が進まないのではないかと危惧する。実際同校では総合的な学習として、1年に1時間だけ、障害者のスポーツ・視覚障害者のスポーツについて学ぶ時間があるのみである。

オリンピックとパラリンピックを単純に比較することはできないが、パラリンピックがオリンピックの記録を上回る一種目をご存知だろうか。それは「車いすマラソン」である。しかし「あれは道具を使ってるから」といった冷たい視線もあり、ここにはスポーツをするにあたって、あまりに土俵が違いすぎる現実がある。

そんな中現時点で思いつくのは、パラリンピック各大会に参加した経験から、その土地の雰囲気話すこと、その実情を伝えることくらいが精一杯。これからどのように理解を広めていくかも含めて、皆さんの話を伺いたい。

オリンピックによるオリンピック教育①

河合季信(筑波大学准教授/オリンピック)

1992年のアルベールビル大会で銅メダルを獲得し、その後は指導者としてバンクーバーまでナショナルチームのコーチを務めた。どちらかといえば現場に関わるが多かったが、実際、選手に崇高な理念を教えるのは簡単なことではないと感じている。

最近ではJOC(日本オリンピック委員会)の仕事も増え、現場から離れた形の支援をするようになってきた。近年、IOCのロゲ会長の働きにより、スポーツの競技だけではない価値を求めるような動向がより一層目立ってきており、昨年のシンガポールでのユース・オリンピックがその最たるものである。

今回は、昨年大学の総合科目(五輪講座)で取り扱い、また先日の附属高校でも展開された授業について紹介する。教材は自分がオリンピック選手時代を通して知り合った友人のインタビュー映像である。ちなみにこれらの友人は各国代表コーチや、国際競技連盟で働くなど引退後もスポーツを支える立場のメンバーである。

20年前の選手が、今どんな考えを持っているかを見せることで、オリンピックの3つの価値(卓越、尊敬、友情)について何か感じてもらえれば良いなと考えたものである。

①中国のコーチ李琰氏のインタビュー

何かに挑戦するとか、ゴールに向かって取り組むということはとても楽しいもの。試合で競い合っても、そのあとにその人たちが互いを理解できることは、すごくいいことだと思う。

②イギリス Nicky Gooch 氏のインタビュー

オリンピックは自信と誇り、尊敬を与えてくれたものである。子どもたちがスポーツに参加したり、オリンピックに影響を受けるのはとてもいいこと。オリンピックは子供たち

が何かすごいことを達成したり、よりよい人生を送る助けなる存在になれると思う。

受講者に3つの価値について考えてもらうことが大切で、この授業の感想からは、「努力している姿を感じることができた」というような記述がみられた。今はまだこれをもとに何か纏めようという段階ではないが、継続しながら何か見えてくるものがあればと考えている。

オリンピックによるオリンピック教育②

山口香(筑波大学准教授/オリンピック)

オリンピックが考えるオリンピック教育として、その教育がこうあってほしいという願いを伝えたい。これはオリンピックの「欠陥」といってはいいすぎだが、オリンピックは開催地に行ってから帰るまでとくにオリンピックの価値に関する教育を受けない。個々が漠然と感じとるだけであり、金メダルを獲りに行こうという時にオリンピックの価値について深く考えるには、難しい現状がある。

また、多くのオリンピックは、自分がオリンピックであった事を活かして生活していることは少ない。学生に対する質問では、北京でさえも金メダリストの名前すら出て来ない現実。オリンピックであることの誇りを感じて生きていける例は少ないのである。

そこで、これらのオリンピック達に対するオリンピック教育を考えることは出来ないだろうか。かつて嘉納治五郎先生は、柔道を通じた人間教育を展開された。それは決して柔道の技だけでなく、心と体の教育。そしてそれを社会に活かそうという教えであった。

速く走るだけなら、車の方が速い。しかしその速さを目指した経験が、スポーツを通じた教育そのものであり、もっと注目されるべき価値である。その面から見ると、彼らオリンピックこそ、オリンピックにしかできないオリンピック教育がある。組織的な問題はあるが、実現に向けて取り組んでもらいたい。

震災復興が叫ばれる中、この時代に一個一億といわれる金メダル獲得にお金を注ぐ価値はあるのか。胸を張ってその疑問に答えを出すためにも、オリンピック教育は必要である。

ところで震災後、選手たちから「私達のプレーをみて元気をもらってほしい」というコメントが目立つ。これは上から目線、おごりでありその勘違いは修正していくべき。スポーツ選手であることがマイナスに働いてはいけない。日本のオリンピックは、幼いのだ。

例えばイランの女子サッカー選手が服装の関係からオリンピック予選に参加できないことに、日本のなでしこはどのようなコメントを残せるだろう。スポーツ選手はそのスポーツを取り巻く環境を学ぶことが大切なのである。大学にも学生を含め多くのオリンピックがいるが、彼らにも、働きかけていきたい。

ディスカッション

「今後のオリンピック教育の展開」

以上の報告を受け、今後オリンピック教育はどのように展開していくことができるのか。研究会の終盤には、このテーマに関してディスカッションが行われた。

河合純一(パラリンピアン/日本パラリンピアンズ協会会長)

山口先生のご発表を聞きながら、私はパラリンピアンとして何ができるかを考えていた。パラリンピックはまだ世に知られていないが、まずは一般の多くの子供に知ってもらうことが、今後の数十年を見据えた上で大事ではないだろうか。ぜひこの組織にも「パラリンピック」という7文字の言葉を入れていただけたら幸いである。近年ではパラリンピックに対する人々の関心も高まってきているが、それでもまだまだ他国に劣る面も多い。選手だけでなく、指導者の待遇や周辺環境についても目を向けていただけたらと願う。パラリンピックにも「卓越・友情・尊敬」の価値は同じに認められるのだから。

長岡樹(筑波大学附属中学校教諭)

秋葉前市長の感想文を冊子にまとめ、一名の文章を副校長が全校集会で発表した。2008年には今日お越しの河合先生を含めたオリンピックの講演会、2009年には河野一郎先生そして2010年には秋葉市長の講演会を行った。

平田佳弘(筑波大学附属坂戸高校教諭)

1月、坂戸高校の一年次生160名を対象に真田先生とJOC研修中のウクライナの学生による90分の講義が行われた。これを機に総合学科である本校の特長を活かしながら、自由選択科目や総合的な学習の時間で模索中。

真田久(筑波大学教授/CORE事務局長)

桶谷敏之氏(CORE研究員/嘉納治五郎記念センター)が国際会議の場やローザンヌIOC本部のオリンピック研究センター担当スタッフに対してCOREを紹介した際の反応を報告する。

IOCオリンピック研究センターのチーフ、ヌリア・ピュイグ氏は「オリンピック研究の成果を教育現場のフィードバックをもらいながら教育プログラムへと活かしていけるCOREのシステムはパーフェクト」と述べた。

イアン・ヘンリー教授、ラフバラ大学(イギリス 同大学でOSCを運営し、IOCからの委託研究なども実施)は、「日常的に教育現場とパートナーシップを結びオリンピック教育を進める事例は聞いたことがなく、世界的にも重要な取組みである」と述べている。

大学と附属学校という現場実践との連携には、世界から大きな期待が集まっている。

阿部生雄(前筑波大学理事/前附属学校教育長)

COREがこれほど早くかたちとして成り立ってきたことを大変嬉しく思う。しかしそれと同時に深刻な問題として挙げられるのは、震災と原発問題がスポーツをすることを無意味化してしまうかもしれないということ。放射能の高さも心配であるが、人間と核はこれ

からどう付き合っていくのか、それは今後のスポーツを考える時に重要となる。その上で秋葉前市長の講演について考えてみると、人格論、国際交流論を理想としつつ、スポーツには平和な社会が根底にあることを認識していかななくてはならないと感じる。筑波の人材やシステムを活かして、これからも継続的に取り組んでいってほしい。

来賓挨拶**和田恵子(日本オリンピックアカデミー専務理事)**

附属学校のシステムを活かした教育実践は、世界のオリンピック教育を牽引するロールモデルになると確信した。日本オリンピック・アカデミーは1978年に立ち上がったが、これまで世界との情報交換はしてきたもののそのリソースを活かせていない現状がある。ぜひ今後オリンピック教育プラットフォームと協力させていただけたらと思う。今後の発展をお祈り致します。

閉会挨拶**清水一彦(筑波大学副学長)**

3月の大震災の影響で遅れたが、本研究会が無事開催されてよかった。学長のもとに設立が決定し現在教育イニシアティブ機構というところで支援をしているが、これからこの組織が様々な形で世界のハブとしての機能を果たすことを願っている。メダルとノーベル賞を両方持つ数少ない大学、そして法律で定める学校のほぼ全てを持っているシステムの強みを生かして、頑張ってもらいたい。

出席者一覧（敬称略）

阿部生雄（前筑波大学理事/前附属学校教育長）
和田恵子（日本オリンピックアカデミー専務理事）
榎本直文（首都大学東京教授）
田原淳子（国士舘大学教授）
大橋たみえ（嘉納治五郎記念国際スポーツ研究・交流センター）
仲前信治（日本パラリンピック委員会）
河合純一（パラリンピアン/日本パラリンピアンズ協会会長）
小林大祐（日本アンチ・ドーピング機構）
黒須朱莉（一橋大学博士課程）
東照雄（筑波大学副学長/附属学校教育長）
清水一彦（筑波大学副学長）
坪田耕三（筑波大学教授）
山口香（筑波大学准教授/オリンピック）
清水諭（筑波大学准教授）
河合季信（筑波大学准教授/オリンピック）
高橋義雄（筑波大学准教授）
宮崎明世（筑波大学助教/附属学校教諭）
中塚義実（筑波大学附属高校教諭）
平田佳弘（筑波大学附属坂戸高校教諭）
寺西真人（筑波大学附属視覚特別支援学校教諭）
長岡樹（筑波大学附属中学校教諭）
横尾智治（筑波大学附属駒場中学校）
苦瓜道代（筑波大学附属聴覚特別支援学校）
松本末男（筑波大学附属久里浜特別支援学校）
附属学校教育局（浅野）

真田久（CORE 事務局長）
竹村瑞穂（CORE 研究員）
大林太朗（CORE スタッフ）
村井友樹（筑波大学博士後期課程）
竹下幸佑（筑波大学博士後期課程）
30名